The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大学教育のプロジェクト学習における抽象的概念化を促す内省支援の研究
Author(s)	上田, 勇仁
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/91889
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　上　田　勇　仁　）	
論文題名	大学教育のプロジェクト学習における抽象的概念化を促す内省支援の研究

論文内容の要旨

本論文の目的は大学教育で実践されるプロジェクト学習における内省と内省支援を経験学習モデルに則して捉え，学習者の抽象的概念化の特徴と課題を整理し，抽象的概念化を促す内省支援の指針を示すことであった．本論文では，第１章において研究課題と内省支援の位置づけを明確にしたうえで第２章から４章までの各章においてプロジェクト学習に内省支援を取り入れた教育実践を行った．

第１章：プロジェクト学習における抽象的概念化に繋がる内省支援

第１章では大学教育におけるプロジェクト学習の事例と特徴を外観したうえで，プロジェクト学習における内省の意義と内省支援の課題について議論し，本研究の枠組みを示した．

大学教育においてプロジェクト学習はカリキュラムの中心に位置づけ実践する事例が報告されており学士力における汎用的技能，態度・志向性，総合的な学習経験と創造的思考力に寄与すると思われる．プロジェクト学習はカリキュラムや授業で求められる学習目標に関連する能力を獲得するプロセスだけでなく，学習者自身の探索的な学習活動によって能力を獲得するプロセスがある．学習者がプロジェクト学習における２つのプロセスを踏まえて成長をしていくためには，教訓を見出していく内省を授業の中で繰り返し行う必要がある．

学習者の学習活動と内省を捉えていくためにデイヴィッド・コルブの経験学習モデルを援用した．経験学習モデルは１.具体的経験２.内省的観察３.抽象的概念化４.積極的実験のプロセスからなる．本研究では「学習者が内省課題に取り組む（内省的観察）さいに，学習目標・成果物と自発的な活動に関する知識・技術・態度について考察し次回の授業回に繋がる記述（抽象的概念化）をする」ことを目指し内省支援を検討する．

プロジェクト学習では，授業計画や学習者の意思決定によって活動内容が日々変化することがあるため，授業回ごとに経験学習モデルのサイクルを促していく必要があり，教員は授業回ごとに内省支援の機会を取り入れることで経験学習モデルを促していくことに繋がる．授業回ごとの内省支援として内省課題等を取り入れる事例が報告されているが，学習者の抽象的概念化に繋がる内省課題の指針について，教育実践を通じて示している研究は少ない．そこで，本研究では，各回の授業終了後に学習者に内省課題を提示する記述を通じた内省支援を研究対象とし，抽象的概念化を促す要素として内省課題を記述させる際の様式に着目した．

内省課題を取り入れる際の課題として，プロジェクトの山場の授業回に比べると準備等の授業回においては抽象的概念化が起こりにくい「授業内容による抽象的概念化の影響」や授業内容を問わず学習者によって抽象的概念化に関する考察が上手く行えない「学習者による抽象的概念化の欠如」といった課題が生じる可能性がある．これらの課題を明らかにしたうえで本研究の枠組みを提示した．

第２章：抽象的概念化の特徴と課題・内省支援の仮説（研究１）

第２章では，まず学習者がハワイの初等中等教育で日本文化を紹介する発表活動に取り組むプロジェクト学習において，授業回ごとの内省課題を取り入れた．提出された内省課題の記述内容をもとにコーディングを行い「報告」「解釈」「計画」「応用」のコードを生成した．「報告」は単に出来事を記述しているだけで抽象的概念化としては十分ではないと判断した．「解釈」「計画」「応用」は学習目標・成果物と自発的な活動に関する知識・技術・態度について考察し次回の授業回に繋がる記述であることから抽象的概念化に該当するコードであると判断した．

つぎに，「授業内容による抽象的概念化の影響」に関して，各回の授業をその授業内容から「準備」「発表」「体験」の３つの種類に分け，授業内容の種類によって記述コードの傾向に違いがあるか検証した．その結果，「準備」「体験」に該当する授業回において「発表」に関連する授業回よりも「応用」のコードが減少する傾向が

みられ授業内容によって抽象的概念化の影響があることが示唆された．そこで，「学習目標の考察に繋がる学習目的カテゴリーを取り入れた同様の記述項目を準備し毎回の内省課題に提示することで，学習目標に関連する考察に繋がり，記述量・抽象的概念化に影響を及ぼす．」という仮説を立て内省支援を検討した．

また，「学習者による抽象的概念化の欠如」に関して，記述コードの傾向をみると「報告」に比べると「応用」について学習者によって記述数の差が大きい傾向があった．学習者によっては，同じ記述項目を提示するだけでは抽象的概念化に該当する記述をし難い可能性がある．そこで，「各授業内容を踏まえて内省課題の評価に関連する観点を取り入れた記述指示を提示することで，記述のしやすさに繋がり，記述量・抽象的概念化に影響を及ぼす．」という仮説を立て内省支援を検討した．

第３章：学習目的カテゴリーを取り入れた記述項目が抽象的概念化に与える影響（研究２）

第３章では，「授業内容による抽象的概念化の影響」に対応した内省支援として，学習目的カテゴリーを参考にして学習目標の考察に繋がる記述項目として『チームワーク』『専門性の応用』を検討し，全ての内省課題において『チームワーク』『専門性の応用』の記述項目を提示することで，どのような授業回においても学習目標と関連付けながら考察することに繋がり，記述量・抽象的概念化の記述を促していくことを目指した．また，学習目的カテゴリーとの比較対象として学習者が学習した・経験したことを自身で検討し記述する『授業内容』の記述項目を取り入れた内省課題を導入した．これらの記述項目を含む内省課題を大学で盆踊りの企画・実践等に取り組むプロジェクト学習において取り入れた．また，記述コードについては第２章で生成したコードに加えて，第３章以降の教育実践においては「分析」のコードを抽象的概念化に該当するコードとした．３つの授業活動の種類「準備」「発表」「実践」によって記述項目ごとに記述量と記述コードがどのように変化するか検証した．

その結果，記述量については，どの記述項目においても「実践」の授業回において記述量が増加する傾向がみられた．他方，記述コードについては，記述項目によって傾向が異なった．『授業内容』の記述項目においては，「準備」「発表」回で「報告」に関する記述が多くなる傾向が見られるが，『チームワーク』『専門性の応用』の記述項目についてはそのような傾向がみられなかった．また，『チームワーク』については，授業活動の種類が異なっても，「応用」に関する記述が同程度の記述頻度であった．『専門性の応用』においては，どの種類の授業活動においても「分析」に関する記述が同程度の記述頻度であったが記述量は限定的であった．

このことから内省課題において学習目的カテゴリーに則した『チームワーク』『専門性の応用』といった，学習目標に関連する同様の記述項目を提示することで，プロジェクト学習の準備段階における「準備」「発表」の回においても，プロジェクトの山場である「実践」回と同程度に「応用」といった記述に繋がる可能性が示唆された．

第４章：解釈と分析を促す記述指示が抽象的概念化に与える影響（研究３）

第４章では，「学習者による抽象的概念化の欠如」に対応した内省支援として，内省課題を評価するルーブリック評価表をもとに解釈と分析を促す記述指示を授業回ごとの内容に則して提示した．授業回ごとの内容を踏まえて解釈と分析を促す記述指示を提示することで，記述のしやすさに繋がり，記述量・抽象的概念化の記述を促していくことを目指した．対象とする教育実践の後半から解釈と分析を促す記述指示を導入し，それらを導入しなかった授業前半と比較することで効果を検証した．

教育実践を通じて受講者からの評価，記述量，記述コードを検証した．その結果，解釈と分析を促す記述指示に対して９割以上の肯定的な評価が得られた．授業前半に比べ授業後半において記述量が有意に多かった．記述コードについては，授業後半で「報告」の記述が減少し，「解釈」に関する記述が増加する傾向があった．一方，「分析」については有意な差を確認することができなかったが，授業の前半に「報告」を中心に記述をしていた一部の学習者においては解釈と分析を促す記述指示を提示することで，自身のこれまでの経験と照らし合わせながら「分析」に関する記述をしていることを確認できた．

このことから内省課題において解釈と分析を促す記述指示を授業回ごとの内容に則して提示することで，記述のしやすさに寄与し，「報告」に関する記述から，自身の考えを記す「解釈」に関する記述が増加する可能性が示唆された．一方で，「分析」に関する記述については，一部の学習者において効果を示したが，分析を促す記述指示の要素を取り入れても「分析」に関する記述については有意差を示さなかった．本研究を対象とする教育実践の学習者にとって「分析」に関連する記述をしていくことの難易度が高い可能性があり他の内省支援の方略を検討する必要があることが分かった．

終章：結論

本論文で構成する研究の結果から，「授業内容による抽象的概念化の影響」「学習者による抽象的概念化の欠如」といった課題が示され，これらの課題に対応した内省支援として，学習目的カテゴリーを取り入れた記述項目や解釈と分析を促す記述指示が，記述量や抽象的概念化に該当するコードの一部に影響を与えることが示唆された．これらの結果はプロジェクト学習において内省支援を検討するうえでの具体的な指針に繋がると思われる．ただし，特定の教育実践で検証された内省支援であるため，一般性を高めていくためにはさらに対象を広げて検証する必要がある．

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　上田　勇仁　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	西森　年寿
	副 査	教授	齊藤　貴浩
	副 査	教授	村上　正行
	副 査	教授	岡部　美香

論文審査の結果の要旨

本論文「大学教育のプロジェクト学習における抽象的概念化を促す内省支援の研究」で対象とされるプロジェクト学習とは、学生が主体となり、例えば地域イベントを計画・実践するような活動を通して、社会実践に関する各種知識や問題解決やチームワークといった一般技能を実践的に習得することを目指す大学授業である。筆者はプロジェクト学習における学習過程をコルブの経験学習モデルで捉えたうえで、授業各回の終わりに課す内省課題、すなわちその授業回を振り返り、学んだことを書かせる課題に着目している。そして、経験学習モデルにおける内省的支援および抽象的概念化のステップが、この内省課題に回答することであり、そこに書かれたものが抽象的概念であると見立てている。この視座から、筆者は自身の調査事例の結果から次の２つの実践上の課題をあげる。①プロジェクト学習の授業では、プレゼンテーションやイベント実施を行うような回では、抽象的概念化がしやすいが、準備などを行う回ではそうでないこと、②そもそも、抽象的概念といえるような記述が難しいこと。

そこで本研究では、内省課題に２つの工夫を加えてその効果を授業実践において検証している。１つは、学習目的カテゴリーと呼ばれる項目（例えばチームワークを学ぶという学習目的があるならば、チームワークに焦点化させるような指示文）を加える方法である。もう１つは、抽象的概念と呼べるような質の高い記述へと導くような指示（経験をどう解釈したか、これまでの学習内容とどう関連付けたか）を加える方法である。その結果、記述内容が変化するかどうかを分析し、これらの方法が抽象的概念化を高める効果を持ちうることを確かめている。

論文審査の評価を述べる。本論文について、内省課題の記述のみに着目しているため、プロジェクト学習全体の学習成果との関係が検討されていないところ、また、一方で今回検討された記述の内容を、抽象的概念化という概念でとらえることが適当であったかといった点での課題や難点は指摘できる。しかし、本論文は内省課題の大量の記述データを、独自の視点で手間をかけて分析し、導入された工夫によって、そこに生まれた変化を見出している。プロジェクト学習という、次代の教育方法として社会的注目をあびつつも、学習成果の捉えがたい授業形式の評価方法を考えていくうえで、貴重な事例となるだろう。経験学習モデルのとしてその成果をとらえようとする視座も今後の発展を期待させるものである。また、内省課題の記述指示文の工夫は、授業者の実践上の負荷に配慮して設定された問題であるためでもあるが、実践可能性が非常に高いことは、実践デザイン研究として価値が認められる。

以上より、本論文を博士（人間科学）の学位論文としての基準を満たすものと判断する。